

令和6年度 墨田区立桜堤中学校 学校経営計画・経営報告書（自己評価・学校関係者評価）

作成者 校長 吉岡 大司

学校教育目標	文武両道の精神のもと、以下の教育目標を定める ○ 確かな知性 ○ 豊かな感性 ○ 健全な心身 スローガン 「「つなぐ伝統 築こう未来」」	○令和6年度 学校経営計画における重点内容 コロナ禍により、社会と子ども達が切り離されていた中、今年度は、人と人との「つながり」や「体験の充実」を一層重視する。また、4つの「CHA」。「CHARGE」チャージ（充電）し、「CHANCE」チャンス（好機）として捉え、「CHALLENGE」チャレンジ（挑戦）し、「CHANGE」チェンジ（変わる）することを推進する。
目指す学校像	（１）一人ひとりの生徒を大切にする学校 （２）「質」の高い教育活動を実現する学校 （３）地域・保護者と共につくる学校	（１）確かな学力の向上 （２）豊かな人間性の育成 （３）豊かな個性と創造力の伸長 （４）開かれた学校づくり （５）教員の資質向上
目指す生徒像	（１）基礎学力を身に付け、自ら学び、将来の夢に向かって努力する 生徒 （２）地域を愛し、思いやりの心を大切にして、自分の行動に責任をもつ生徒 （３）心身ともに健康で、何事にも根気強く挑戦する生徒	特に、（５）においては、学びの主体は生徒である。「主体的・対話的で深い学び」の授業を展開できる授業力を生徒に身に付けさせるために、全教職員が教育公務員としての使命感和情熱をもち、校長の学校経営方針に基づいて学校全体で学力向上の取組を組織的に行う。職員会議や校内研修等を通じてサービスの厳正化を図り、サービス事故の未然防止を徹底する。また、日頃から職務上・身分上、教育公務員として自覚をもたせ、サービスを厳守させ、学校への信頼を獲得する。特に、「教師は最大の教育環境」という考えに立ち、立ち居振る舞い・言葉遣い・服装・受容的な態度等、教師としての在り方に十分配慮する。（人権上の不注意や不適切な言動、体罰等の厳禁はあってはならない。）
目指す教師像	（１）一人ひとりの生徒に目を向け生徒のために全力で何事にも取り組む教師 （２）授業を第一に考え、授業力向上のための実践と研修に取り組み、常に創意工夫する情熱的な教師 （３）すべての教育活動に積極的に取り組み、組織的に協働する教師	

項目	取組目標	具体的方策	取組指標		成果指標		分析	改善方策	学校関係者評価			
				評価		評価			自己評価	改善方策	意見等	
各教科指導等	確かな学力を育てるための分かりやすい授業の実施	○「桜堤中学学習スタンダード」に沿って授業の導入時に「学習のねらい」を明示し、授業終わりに「学習のねらい」が達成できたか、教員に確認させる。 ○全授業で、ＡＩアプリを活用した授業形態を導入するとともに、授業の始めに５分間の前時の授業の復習タイムを導入する。授業だけでなく家庭学習でも多くの時間を活用させる。	4	授業に対して意欲的に取り組む生徒を育てる。	3	4	授業アンケート「私は授業に対して意欲的に取り組んでいる」８０％以上	3	各単元・題材の授業において、ＡＩアプリやタブレット端末を効果的に活用し、主体的に取り組む生徒が増加した。桜堤中学学習スタンダードに沿った授業を全教員が行うことで、生徒のアウトプット設定はできた。	B	B	先生の一層の授業力の向上を図る取組を期待したい。
			3	桜堤中学学習スタンダードに沿った授業を全教員が行う。		3	毎時間、全教員が学習のねらいを板書し授業終わりにアウトプットする。					
			2	どの授業もねらいやまとめ、アウトプットを設定。		2	授業アンケート「各教科において、授業が分かりやすい」の全年肯定割合が８０％以上。					
			1	ＩＣＴ機器やタブレット端末等活用した授業展開。		1						
	特別な配慮を必要とする生徒に対しての、特別支援委員会を活用した組織的な支援。	○個に応じた指導を支援員や特別支援教育コーディネーターを中心に、委員会とＳＣが連携し特別な配慮を行う。 ○巡回相談員やＳＳＷ、委員会がＳＳＲに登校する生徒の情報共有を全校にフィードバックし、特別な支援を必要とする生徒への具体的な支援を組織的に行う。	4	個別指導や支援計画を基に委員会とＳＣが連携し計画的に行う。	4	4	委員会が６月までに個別支援計画等を作成し、指導の方向性を確認する。	4	個別指導や個別支援計画をもとに、個に応じた丁寧な指導を特別支援委員会とＳＣが連携しながら計画的に行うとともに、巡回相談員や委員会での情報共有を図り、特別な配慮を必要とする生徒の支援を組織的に行った。	A	B	もう少し何か、地域が手伝えることができないのか、今後検討・議論・模索していく。
			3	巡回相談員や委員会が支援を組織的に行う。		3	巡回相談員やＳＣ、特別支援教育専門員との連携し、生徒、保護者への適切な支援・助言を行う。					
			2			2						
			1			1						
	教員の指導力・授業力を高めるための、組織的な取組。	○これまでの研究成果を活用し「横断型授業づくりを通して、生徒の自己肯定感を高める」研究テーマに迫る授業を実践。 ○ジグソー法やＩＣＴ機器を活用した主体的・対話的で深い学びを実現する。 ○「指導と評価の一体化」を更に進め、全教員が意欲的に授業改善、授業力の向上。	4	墨田区研究奨励校ＩＣＴ教育推進校や特色ある学校づくり推進校の成果を活かす。	4	4	ＩＣＴ機器やタブレット端末を活用した授業実践を年３回行う。	4	同僚性を意識した横断型授業づくりをテーマとし、研修計画や企画提案を考案させたことは、成果である。また、全教科で４人組の授業形態を発展させることもできた。	A	B	教師の働き方改革はどうなっているのか
			3	タキノノミール理論と「指導と評価の一体化」を結合し、全教員が授業力向上を目指す。		3	「指導と評価の一体化」の校内研修を年３回行い、研修成果を授業改善に生かす。					
			2	研究テーマに迫るため、ジグソー法やＩＣＴ機器を活用した主体的・対話的で深い学びを実現する。		2	７、９、１月に講師を招いた校内研究を３回実施。					
			1			1	ジグソー法やＩＣＴ機器を活用した主体的・対話的で深い学びを実現する。					
生徒の基礎・基本の定着への取組。	○放課後学習教室ではＳＳＴを活用し、基礎学力向上と学力上層への対応を図る。 ○家庭学習を定着させるため１日３０分以上取り組ませる効果的な宿題を提案。 ○各種検定（漢検・数検・英検）の受検率と合格率をアップする。 ○国語・数学・英語コンテスト」の合格率を上げる。	4	放課後学習教室では、経営推進部が中心にＳＳＴと協力して実施する。	4	4	区調査の結果を踏まえ、後期より、定期的に放課後に数学と英語を各学年で２０回以上実施。	3	英語・数学を中心に、桜堤スタンダードの徹底を図るとともに、１１月より、ＳＳＴ等を配置した放課後補習教室（３０分）を週２回確実に実施させ、全校生徒の３５％を参加させたことは成果である。	B	B	今後も、継続して、基礎学力の定着や学力向上に取り組んでもらいたい。各家庭での学習時間には課題はあるが、区や国の学力調査においても成果が得られたように今後も学校の取組等として努力してほしい。	
		3	朝学習で５教科対応のミライシード等で活用しドリル等の反復練習させ基礎・基本の定着を図る。		3	生徒アンケートで「学習に自信がついた」と８０％以上の生徒が実感できるような宿題設定を目指す。						
		2	各種検定（漢検・数検・英検）の受検率と合格率をアップできるように各教科で支援する。		2	検定受験率を３０％以上、検定結果を前年度の１０％アップを目標にする。						
		1	基礎学力向上のための「国語・数学・英語・理科・社会」コンテストを実施して学ぶ意欲の醸成を図る		1	５科のコンテストと授業を連動し、各学年行事の取組としコンテストの結果を数値化して検証する。						
自己実現に向けたキャリア教育・進路指導。	○マイキャリアノートを活用し地域との協力や地域人材の活用を基本に、【１年】職業調べ【２年】職場体験【３年】進路選択等を関連付けた指導を継続的に実施。 ○上級学校や社会で活躍する人達より実際の姿を学び、将来の自分の姿を考えさせるなど地域や企業の方々の意見を聞く機会を設定。	4	上級学校や社会で活躍する人達より、実際の姿を学び、将来の自分の姿を考えさせる。	3	4	年間を通して、各学年でキャリア教育を１０から１５時間実施する。	3	地域との協力や地域人材の活用を基本に、職業調べや職場体験、進路選択等の指導を発達段階に応じて継続的に実施できた。また、上級学校や社会で活躍する人たちから将来の自分の姿を考えさせる機会になった。	B	B	地域は協力を惜しまないので、もっと、相談してほしい	
		3	地域人材を活用し、職業調べや職場体験、進路選択等を関連付けた指導を継続的に実施する。		3	地域人材を活用し、学校支援ネットワークや地域の方による出前授業や面接練習を実施する。						
		2			2							
		1			1							

項目	取組目標	具体的方策	取組指標		成果指標		分析	改善方策	学校関係者評価		
				評価		評価			自己評価	改善方策	意見等
生活指導等	問題行動の予防や解決に向けた組織的な取組。	○生徒指導資料「桜堤中スタートライン」を活用し、全教職員で生徒に寄り添う指導を行う。 ○特別支援委員会の主導で各学年の課題のある生徒の具体的な支援、取組を継続し、充実させる。 ○不登校生徒や支援が必要な生徒やその保護者に対して、特別支援委員会を通してＳＣやＳＳＷ、関係諸機関との連携を図る。	4	「桜堤中スタートライン」を活用した生活規律を確立させ、全教職員が生徒に寄り添った指導を行い共通理解を図る。	4	5月最初の週に「桜堤中スタートライン」を活用とした生徒指導を全校で行う。職員会議において全教職員で共有する。	4	生徒指導資料「桜堤中スタートライン」を活用し、全教職員が生徒に寄り添った指導を行えるよう共通理解を図れた。不登校生徒や支援が必要な生徒やその保護者に対して、特別支援委員会でＳＣやＳＳＷ、関係諸機関との連携を支援できた。	A	A	校則を見直すのはいいと思うが、ルールがゆるくなり学校としての機能を維持していけるのか地域として不安になる。学校は、「だめなものはダメ」と言う姿勢を持ち続けて欲しい。
			3	特別支援委員会主導で各学年の課題のある生徒の具体的な支援、取組を継続する。	3	6月初旬までに学年会で話し合い、具体的な取組で共通理解を図る。					
			2	不登校生徒や支援が必要な生徒、保護者に対して、特別支援委員会で関係諸機関との連携を支援する。	2	毎週の特別支援委員会で具体策を検討し、計画的に支援を行う。					
			1	保護者との連携を密にし、早期発見、早期指導に努める。	1	不登校生徒数を６％以下に減少。問題行動傾向のある生徒の保護者にＳＣとの面談を計画的に勧める。					
	基本的な生活・社会習慣、人間関係づくりのための心の教育。	○特別な教科「道徳」を各学年所属教員が輪番で授業を行う。 ○生活指導主任が生活指導たより（自他共栄）を発行し、ルールやマナーの周知徹底を図る。 ○生活目標「あ・じ・み・こ・し」を周知徹底する。 ○桜堤中ブロック幼保小中一貫教育を活用した人間関係の構築を図る。	4	特別の教科「道徳」の授業を活用し基本的な生活や社会習慣、人間関係づくりの心の教育の充実を図る。	4	心のノートや都の道徳資料を活用し、特別の教科道徳を３５回実施。	3	心のノートや都の道徳資料を活用し、特別の教科道徳を３５回実施できた。「生活指導たより（自他共栄）」毎月発行し、健全育成に努めた。「生活目標あじみこし」を教師自ら率先し実践し、肯定的意見が８０％以上と達成した。	A	B	１年間を通して、各学年でＳＮＳ等のネット上のトラブルが頻発している現状がある。それらに対して、関係諸機関等の連携を強化し、学校の継続指導に期待する。
			3	生活指導主任に「生活指導たより（自他共栄）」を発行させ、ルールやマナーの周知徹底を図る。	3	生活指導たよりを毎月発行する。内容については、学年・学級で周知徹底し、健全育成に努める。					
			2	教職員や生徒へ朝会や集会を活用し「生活目標あ・じ・み・こ・し」の徹底を図る。	2	教室・廊下に「生活目標あじみこし」を掲示し、啓発を図るとともに教師自ら率先し実践。					
			1	幼保小中一環教育で幼児・児童・生徒との交流の充実を図り、幼保小中の連携強化を図る。	1	桜堤中ブロックの幼保と小、小と中、中と幼保の子どもの交流の活性化を図る。					
	安全を確保するための取組。	○安全指導・避難訓練を年間計画通りに実施する。 ○向島警察、青少年育成委員会、ＰＴＡ校外委員と連携を図り、長期休業中にパトロール（声かけ運動）を実施し、生徒たちの健全育成に努める。	4	安全指導・避難訓練を年間計画に沿って実施する。	4	生徒や教員への事前予告なし取組を導入し、繰り返し行う。生徒の危険回避力を育成する。	4	安全指導・避難訓練を年間計画に沿って実施できた。向島警察やＰＴＡ校外委員と連携を図り、長期休業中にパトロール（声かけ運動）を実施し、生徒たちの健全育成に努めることもできた。	A	A	先生方の参加率補講乗している。継続を望む。
			3	向島警察やＰＴＡ校外委員と長期休業中にパトロール（声かけ運動）を実施し、健全育成に努める。	3	青少年育成委員会や警察に協力を得ながら、教職員に地域行事に、１回以上参加協力をさせる。					
			2		2						
			1		1						
学校の総	今年開校したチャレンジクラスの周知徹底や準備・運営を行い、温かい人間関係や活気あふれる学校づくりを構築。	○チャレンジクラスⅠ組の周知徹底と教育課程の工夫や充実を図る。 ○ＳＳＲの充実を図る。４月当初から運営を開始。支援員の日報や授業観察を通して養護教諭や特別支援コーディネーター等と情報共有を強化する。 ○週１回特別支援委員会を開催し、個別支援計画に基づいた指導を実施し８０％の教室復帰を目指す。	4	本校のホームページや学校説明会で、チャレンジクラスⅠ組の周知徹底を図る。	4	チャレンジクラスⅠ組の保護者や当該生徒のアンケートで自己肯定感が１００％になるよう目指す教育課程の工夫や充実を図る。	4	区教委指導助言支援のもと、都の開発委員会と協働してチャレンジクラスの充実を図ることができた。また、特別支援委員会で具体策を検討し、計画的に支援を行うこともできた。全校の不登校生徒数を６％以下に減らすことが課題。	A	A	地域も注目している頑張っており取り組んでほしい。
			3	養護教諭や特別支援コーディネーター、ＳＣと情報共有し、ＳＳＲの運営の充実を図る。	3	養護教諭や特別支援コーディネーター、ＳＣとの不登校生徒の情報共有を実践し、ＳＳＲの利用人数を１００％を目指す。					
			2	週１回の特別支援委員会で情報共有を強化し、不登校生徒の教室復帰の支援を目指す。	2	週１回特別支援委員会を開催し、個別支援計画に基づいた指導を実施し８０％の教室復帰を目指す。					
			1		1						
	経営方針に基づいた組織的な教育活動・学校運営	○運営委員会で、職員会議の議題整理を実施し、経営方針の共通理解を図り、全教職員で組織的な教育活動・学校運営を展開する。 ○教務部や生活指導、進路指導部、経営推進部の職務内容を整理し、働き方改革を推進する。	4	運営委員会で会議の議題を整理することで、経営方針の共通理解や組織的な教育活動を展開させる。	4	運営委員会を年３５回以上実施。主幹教諭と各学年主任を中心として、報・連・相の徹底を図る。	4	企画運営会議において、職員会議の議題整理を確実に実施したことで経営方針の共通理解を図れ、全教職員で組織的な教育活動・学校運営を展開できた。体験学習の充実を図り、学力向上の一因となった。	A	A	行われていると思う。
			3	進路学習部や経営支援部の職務内容を見直し、４部会の適正化を図る。	3	当初自己申告に伴う面接の際、各分掌主任に、夏休みまでに見直し、改善の提案をさせる。					
			2		2						
			1		1						

項目	取組目標	具体的方策	取組指標		成果指標		分析	改善方策	学校関係者評価		
				評価		評価			自己評価	改善方策	意見等
管理運営	生徒の実態に合わせた教育目標設定及び評価	○生徒・保護者に、アンケートを実施することにより、教育目標達成に向けた 評価を行うとともに、そのことを、PDCAサイクルによるカリキュラムマネジメントに活かす。	4	生徒・保護者アンケート調査を実施する。	4	生徒・保護者による年2回（7月と1月）の授業アンケートを実施する。	生徒・保護者アンケート調査を実施し、教育目標達成に向けた「OODAループ」による視点をカリキュラムマネジメントに活かした。生徒・保護者による年2回（7月と1月）の授業アンケートや学校生活に関するアンケート、i-check 等の結果をその都度、分析し、学校だよりで発信できた。	生徒や保護者アンケートを年間2回実施し、また、年度末には、自己評価を行う。教育目標達成のために 評価を行い、PDCAサイクルやOODAループによるカリキュラムマネジメントを一層充実させる。	A	A	アンケートは、興味部内と感じた
			3	教育目標達成に向けた評価を行い、PDCAサイクルやOODAループによる視点をカリキュラムマネジメントに活かす。	3	養護教諭 による学校生活に関するアンケートやi-check 等の結果をその都度、分析し、学校だよりで発信する。					
			2		2						
			1		1						
	教育環境・設備等の整備状況	○機能的な校舎を有効に活用した教育活動を実施する。 ○安全を担保し、校内の教育環境・設備等を充実させる。	4	校舎を有効に活用した教育活動を実施する。	4	習熟度別少人数授業や各授業で、授業形態の工夫やハード面の有効活用の方法を提案する。	校舎を有効に活用した教育活動を実施し、校内の教育環境・設備等の安全管理を徹底できた。習熟度別少人数授業や各授業で、授業形態の工夫やハード面の有効活用の方法を提案できた。今年度も、昨年の反省を活かし、運営委員会、経営推進部を中心に、教育環境・予算・設備の改善策を検討・提案できた。	施設面において、十分に機能を発揮した空調設備、機能的な校舎を有効活用した教育活動を実践する。安全を担保し、校内の教育環境・設備等を充実させる。	A	A	10周年を迎えても、きれいな校舎である。管理が行き届いていると感じます
			3	校内の教育環境・設備等の安全管理を徹底する。	3	運営委員会、経営推進部を中心に、教育環境・予算・設備の改善策を検討・提案する。					
			2		2						
			1		1						
家庭・地域連携	教育方針や日常の教育活動の様子などを伝える取組	○毎月、毎週、桜堤中学校の生徒の様子や活躍の姿、よさを積極的に、学校だよりや学校ホームページで発信していく。 ○保護者会全体会・学年懇談会を実施して、周知・協力を求める。	4	桜堤中学校の生徒の様子、活躍の姿、よさを積極的に発信する。	4	学校ホームページを毎週4回更新し、桜堤中学校の良さを発信する。さらに、学校情報メールを積極的に活用する。	生徒の様子や活躍、よさを積極的に発信できた。学校DX推進し、教育活動の充実、効率化を図ることができた。保護者会全体会・学年・学級懇談会を実施して、桜堤中の「特色ある学校教育」の周知・協力を求める活動ができた。	学校ホームページを毎週更新し、桜堤中学校の良さを積極的に発信し、各学年や学級、部活動、委員会活動等も毎月、学校HPにアップする。保護者会の場の設定やその内容を事前に十分検討して、多くの保護者が参加できるよう工夫する。前年度の参加率プラス10％を目指す。	B	B	学校が教育活動を発信できる学校ホームページの内容に改善を進めてほしい。また、学校ホームページでは、「今日の桜堤中学校」で毎週3～4日の教育活動っ楽しみにしている。
			3	学校DX推進し、教育活動の充実、効率化を図る。	3	○各学年、学級、部活動、委員会活動をタブレットを活用してポスターにまとめ、毎月、学校HPにアップする。					
			2	保護者会全体会・学年・学級懇談会を実施して、桜堤中の「特色ある学校教育」の周知・協力を求める。	2	保護者会の設定やその内容を事前に十分検討し、多くの保護者が参加できるよう工夫する。前年度の参加率プラス10％を目指す。					
			1		1						
	保護者や地域の理解や協力を得た教育活動の推進	○「あいさつ運動」を毎月第1週の一週間に、桜堤中地区青少年育成委員会や町会、自治会、PTAの協力で計画的に実施する。 ○地域清掃（墨堤通り・東白鬚公園内）を行う。 ○桜堤中地区青少年育成委員会主催の「桜堤フェスタ」を学校・地域・PTA・生徒が連携を図り、地域コミュニティの場となるよう運営する。	4	「あいさつ運動週間」を毎月第1週に設定し、桜堤中地区青少年育成委員会や町会・自治会、PTAの協力のもと実施する。	4	毎月第1週に「あいさつ運動週間」を実施し、地域、保護者、学校が協力して生徒を見守り、心の教育を推進する。	毎月第1週に「あいさつ運動週間」を実施し、地域、保護者、学校が協力して生徒を見守り、心の教育を推進できた。地域清掃は、今年度は実施できなかった。桜堤フェスタを3月に開催し生徒のボランティア活動も含め、全生徒の70％以上が参加できるよう計画・運営したが、実際は70％達成できなかった。	「あいさつ運動」を毎月第1週に桜堤中地区青少年育成委員会や町会・自治会、PTAの協力のもと計画的実施。桜堤中地区青少年育成委員会主催の桜堤フェスタを学校や地域、PTAが連携を図り、参加率を上げる企画・運営に 関わられるよう充実を図る。	B	B	月1回の一週間の地域とのあいさつ運動は、計画通りにできたことは、素晴らしい。今後も、地域との連携を意識した活動を期待する。桜フェスタ等で、学校やPTA、地域、青少年健全育成委員会が「つながる」ことは、桜堤中の伝統で、大切にしていきたい。今後も、地域との話し合いを充実させ、具体的な改善策が望まれる。
			3	生活指導部と生徒会が協力・企画し、保護者や青少年育成委員会の協力のもと地域清掃（墨堤通り・東白鬚公園内）を行う。	3	地域清掃は、年間3回実施し、各学年とも参加率80％以上を目指す。					
			2	桜堤中地区青少年育成委員会主催「桜堤フェスタ」を学校・地域・PTA が連携を図り、地域コミュニティの場とする。	2	桜堤フェスタを開催する。生徒のボランティア活動も含め、全生徒の70％以上が参加できるよう計画・運営する。					
			1		1						

○令和6年度 学校経営報告のまとめ（総括）

学力向上は、本校の課題である。今後も区の学力調査の結果、年間4回の定期考査の結果を軸に授業改善を進めていく。各教科指導では、より高い授業の質を「桜堤中スタンダード」をベースに取り組んできた。国語と英語の向上は顕著で、平均を超えてきた。令和7年度は、区のA Iアプリのミライシードの活用に加え、学力向上推進マネジメントの研究成果や効果を基礎とし、反復練習やドリルテキストの導入を図り、一層の基礎学力の定着や向上を継続したい。

安全で安心な学校として、防災教育や防災授業は、地域の方々の協力を得て、7月、9月、2月により「質」の高いものへの取組とすることができた。安心な学校では、教室で学ぶことが難しい生徒をS S R（スモールステップルーム）で受け入れ、学校全体で取組の方向性をその都度、確認しながら運営し、大きな成果を上げた。チャレンジクラス（校内別室教室）を開設し、「学びの保障」や「学びをあきらめさせない」などの様々な取組は、青少年育成委員会からも高く評価された。今後も本校の周辺に位置する「防災団地」と本校を結び付け、地域への「自助・公助・共助」の学びへ発展させいくことが課題である。多くの学校関係者・地域の方々から、励ましをいただきながら新たな教育活動を、今後も積極的に導入していきたい。コロナ禍で失った体験活動や経験を生徒に積み上げさせて、今後も、更に質の高い教育を実践し、生徒が「自分もやればできる」と肌で感じるができる自己効力感を育成できる教育を目指す。